
伝え

日本口承文芸学会 会報

【伝え】 第41号 2007年9月

〒214-0014

神奈川県川崎市多摩区登戸 3460-1

パークホームズ 704

小澤昔ばなし研究所

Tel:044-931-2080

一つの曲り角

大島 建彦

日本口承文芸学会という学会は、昨年度に三十周年を迎えたのであるが、この学問の先達の熱意に導かれ、多くの第一線の研究者の努力にささえられて、たしかに順調な発展をとげてきた。しかも、この三十年間を通じて、日本の村落社会の変貌にともない、口承文芸の伝承の実態は変ってゆき、これまでの調査の方式を守りつづけるのもむずかしくなり、新しい研究の進路をきり開くことが求められている。さらに、まことに思いがけないことには、この学会の運営までも、やはり一つの曲り角にさしかかっていた。実は私のようなものが、この学会の会長をつとめなければならないというのは、そのようなきびしい学問の現実を示すものであった。

くたたくはのべないが、私自身は十数年前にこの会長をつとめさせていただき、とくにその役からひかせていただいたものである。今日では、名誉教授という名の無職であって、どのような機関にも属していないので、自前で事務局をかかえることもできず、大会や例会を招くこともできない。それにもかかわらず、このたびの役員の変更では、どなたにも会長をひき受けていただけなかったのも、やむをえずこれをおひき受けしなければならなかった。そこで、小澤先生の昔ばなし研究所に、この学会の事務局をおかせていただくとともに、部門別の理事の担当にしたがって、それぞれの会務の処理を進めていただくことにより、その大きな責務をはたしてゆくこととなった。

特に口承文芸の分野に限らないが、日本の民俗学の進展というのは、各地の研究者の精進による、着実な研究の実績にささえられてきたものである。日本口承文芸学会の運営が、今や一つの曲り角にさしかかかって、いわゆる中央の学者だけに頼りきれないとすると、幅ひろく各地の研究者にかかわっていただくことによって、これから進むべき道をきり開いてゆくほかはない。そのようなこともじっくりと考えて、何よりもこの学問の進路を見すえながら、何とか二年間の任期をつとめあげ、いっそう適任の方々にひき継いでゆくことを願っている。

(東京都)

追悼

6月16日に伊藤清司先生、6月20日に野村純一先生と学会の発展に尽力されたお二人の先生がご逝去されました。お二人を偲び、原稿を寄せていただきました。

野村先生と「ひろしまの民話」

栗原 秀雄

南小岩のお宅の、あの2階のお部屋に、白い布帛に包まれた先生のお骨がありました。29年前、初めてお訪ねした時には、ここで民話についてごく初歩的な手ほどきをしていただいたのでした。そこが、お別れのお香を捧げる斎場になりました。

1978年3月。新企画のラジオ番組「ひろしまの民話」（中国放送）の放送開始を1ヶ月後にひかえて、私は途方にくれていました。企画の第一の柱は、語り手を現地に訪ね、語られた声と言葉をそのまま放送することでしたから、何よりもまず語り手を探さなければなりません。いったいどこへ誰をたずね、何を話してもらったらよいのか……そもそも民話とはどういうものなのか？ 皆目見当がつかず、先生におすがりしたのでした。窮鳥はその懐に救われました。『芸北地方昔話集』をいただき、それが昔話を収録する最初の手がかりになりました。

第1回の放送には遠路広島までお越しいただき、解説をお願いしました。それからほぼ5ヶ月後、放送の進みぐあいを気遣ってくださった先生に、採訪の現地指導をお願いしたのです。快くお受けいただき、夏休みに、國學院大學説話研究会の学生4人を伴って広島まで来てくださいました。その中の1人が高木史人さんでした。そしてその後も、毎年欠かさず春休みと夏休みに学生数人を伴って来広され、語り手探しを助けてくださったのです。採訪地は4年間に7拠点・19市町村におよびました。これが放送を続けていく上で計り知れない力になったことは言うまでもありません。

1981年、日本民間放送連盟賞・ラジオ放送活動部門で、「ひろしまの民話」は金賞を受賞しました。

先生は自分のことのように喜んでくださいました。

野村先生の声には温かみがあります。相手を和ませる声のひびきがあります。そして、いつも笑顔があります。およそ大学教授やマイクロフォンなどというものは、お年寄りがケブツたがる最たるものですが、その壁を取り払い、なごやかな雰囲気を出す決め手になったのは、あの穏やかな声と笑顔だったにちがいません。大学教授然とした尊大さやシカツメラシサのない人柄でした。

國學院大學一行を迎える集中採訪には、県立広島女子大学・広島大学の学生たちにも毎回数人ずつアルバイトで参加してもらいました。野村先生のお供はいつも彼女たちでした。足手まといになることも意に介さず、彼女たちは喜々として随行を楽しんでいました。

1982年3月、最後の集中採訪は神石郡神石町でした。これで4年間お世話になった先生とも、説話研究会の皆さんともお別れになりました。広島駅のプラットフォームで、県立広島女子大学のSさんは、野村先生の首に抱きついて声を上げて泣きました。（広島県）



国際子ども図書館全面開館記念シンポジウム 2002年7月

伊藤清司さんを偲ぶ

飯倉 照平

今年6月16日、伊藤清司さんが亡くなられた。享年73歳、骨髓異形成症候群という造血機能が低下する病気であった。昨年秋から入退院をくり返されていたが、亡くなられる直前まで（体調の良い時間をえらんで）あちこちに電話をされてい

たので、身内の方のほかは、だれもそれほど重い病状とは思っていなかった。

7月28日に開かれた「伊藤清司先生を偲ぶ会」では、戦争末期に学徒兵として召集されて以来、慶應義塾大学とのかかわりで最後まで過ごされた伊藤さんらしく、同学関係者の思い出がこもごも語られた。ほかにも外部からは、中国古代史研究会、中国民話の会、日本民族学会の挨拶があった。

当日のみなさんの話をうかがうと、『山海経』を中心とする中国神話の研究にはじまり、日本と中国の説話あるいは民俗の比較研究の分野で大きな仕事をされた伊藤さんであったが、史学科東洋史学専攻という枠組のなかでは、自分は正統的なテーマをあつかっていないという居心地の悪さを感じていたらしい。(もちろん松本信廣という同学の先達があり、また晩年の柳田國男に会ったおりに「中国にも絵姿女房譚がある」と話したことが彼等の比較研究へのきっかけになったというような重要な動機はあったわけだが。)

そんな気持ちがふつきれたのは、『口承文芸研究』30号に伊藤さん自身が書いているように、1980年に日本口承文芸学会代表団の一員として中国を訪れて以後のことであったと思われる。それにつづく1年間の中国留学は、ただちに予期したほどの成果をあげなかったにしても、以後の度重なる少数民族地区などの訪問と、中国の研究者たちの熱のこもった反響は、それにつづく文献研究への情熱をかりたてることになった。(その仕事の内容については『口承文芸研究』に書く予定の文でふれることにしたい。) (千葉県)



中国雲南省大理にて 1998年8月

第53回研究例会 「口承研究と女性」

2007年3月3日(土)

会場 日本大学文理学部

竹内 邦孔

今回は、本シンポジウムに先駆けて三回のプレ研究会が開催されている。それにもかかわらず、それともそれゆえか、まずはこの課題そのものが本当に成立するのかという問いかけが司会の藤井貞和氏からなされた。さらにこのテーマは日本の口承研究だけの問題ではなく、女性研究という世界的な思想の潮流の中にあることを踏まえて考えたいという表明があった。

そして、間宮史子氏が「昔話研究と女性—ドイツ」と題して、ドイツで昔話の女性に視点が置かれ始めた1970年代後半から、ジェンダー研究が主流となり、学会内に女性研究委員会が設置された現在までを概説し、「語り手は女性」というイメージがヨーロッパで普及した背景、グリムはどのような人物を“よい語り手”と評価したかということや、“家庭は女性”という図式から女性の話には女子教育の役割が求められ、外で語る男性の話とは異なった機能を持ったことを紹介し、藤久真菜氏「昔話の語り手」と女性」にバトンを渡した。氏は、事典にもみられる「昔話の語り手は女性・語り婆」という表現に疑問をなげかけ、「『昔話研究』」、「水沢謙一」、「シリーズ昔話集」という時期を設定して資料をたどり、当時の調査者たちが書き残した実感を切り取った。また「男語り」「女語り」の語が含み込む内容の多様性、優れた語り手たちの伝承経路が必ずしも女系列ではないことや、婚姻によって女性にながめに動くことで「計り知れない幾多の波紋を生じ」という野村純一氏の指摘から、男女を異質なものと区別する方法だけでなく、そこに今後の糸口を探したいとした。ここまで、昔話を中心に据えて内外の状況を考察してきた二人の取り上げたテーマが重なっていく点は興味深い。つぎに山田巖子氏は「試される母—異常出生譚の需要と展開—」で、柳田國男が「当事者の学問」として女性研究を女性に託し、語り手の心情を汲み取って聴く女性研

究者の出現を期待したという点を指摘した。さらに自身が立ち会った世間話の場を考察することから、“出産”という話し手と聞き手の生活経験や性差によって、大きく語り方が異なる話柄があると指摘する一方で、性差は属性の一つに過ぎず、ひとくちに女性といったなかにもさまざまな位相があると述べた。たしかに、語りの場では、男/女という二項対立では捉えきれない力学が絡み合いながら働いていることは見過ごしてはならない点である。

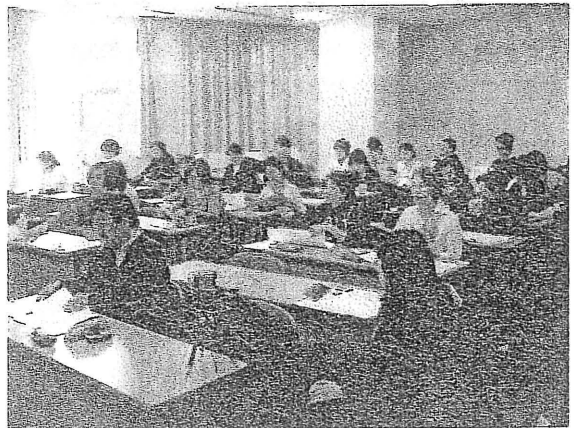
そして、プレ研究会での発表者という立場から、高木史人氏が昔話/伝説/世間話とせず、すべてを含み込んだ大きな話の場の中での女性の役割を考えていく必要性を説き、さらに昔話と現実社会との男女のありようはけして無縁ではないとした。野村典彦氏は「口承研究と女性」といった場合、語る立場でも聞く立場でも、女性をもつ男性からまなざされ消費される性、母、産まない性といったさまざまな面をつき合せて考えていく必要があるだろうと述べた。

続けて、間宮氏が質問に答えるかたちで男女それぞれの話の機能の背景にあるヨーロッパの社会史を説明・補足した。藤久氏に対しては、森洋介氏が男/女モデルが構築される手前であって書き残されなかった、研究者の実感のようなものが重要ではなかったかと指摘し、飯倉義之氏が1970年代以前は昔話の編集や研究を男性がリードしてきたという事実を研究史の中で捉えていく必要性を述べた。山田氏には、森氏から“当事者”とは誰か、また“当事者性”を強調する反面、限定されていってしまう部分をどう広げていくかということなど活発な討議が起こった。最後に荻原真子氏から、今回のテーマには、口承のなかの女性と研究史のなかの女性という分けて考えていきたい問題があるという指摘や、農耕社会において多忙のために母の存在が抜けてしまうことから、語り手が老女になるという社会的視点の必要性と、女性が共同で働く場における口承ということを考えていかないと、性差の問題やジェンダーの問題を具体的に考えていくことはできないとの提言により総括がなされた。

今回、このテーマには膨大な疑問の蓄積があるに

もかわらず、それらが検討されてこなかったこと、研究史のなかでも関心の目が十分に向けられていないことがわかった。このシンポジウムによって口承研究からその疑問をひらいていく端緒をそれぞれがつかんだのだと受け止めたい。

(東京都)



第53回研究例会

第31回大会

2007年6月2日(土)、3日(日)

会場 弘前学院大学

研究発表 6月3日

〈第1会場〉

齊藤 純 (奈良県)

第1会場は1号館3階304教室。発表者は5人で、第2第3会場より1人多い。そのため他会場より30分早く、9時から発表開始。司会は齊藤純・戸塚ひろみ。発表内容は、いずれも国内の伝説を扱うものになった。

最初の発表は、入江英弥(國學院大學)「桶職人の語り—伝説の伝播に関与した職人の活動—」である。桶作りの職人が伝えた伝説を扱い、職業形態の影響や伝承の果たす役割などを考察した。具体的には「昔、桶屋が敗走した武将を桶の中に匿って命を救い、武将から後片付けの免除を得た」とする話で、かつて小島環礼「桶屋敷功記—桶屋の文芸史—」『民俗』37が注目して以来、同誌や『静岡県史 資料編 25 民俗3』などで資料収集や考察がなされていた伝説である。

発表者は考察をさらに進め、桶職人から実際に伝承を聞き取り、あわせて作業の具体相を調査した。発表によれば、本話は桶屋仲間でも口承されていたが、注文先で作業する出職の仕事により地域社会に定着した。話の役割としては、箍(たが)直しといった往来での特殊作業を説明し、その片づけの手間を省く。また、客や見物人と円滑な関係を作り、職人氣質を誇るといった事柄が指摘できる。

本発表について、会場から、「語り」ではなく「話」ではないか。また、紹介された慣用語「桶屋のやりっぱなし」の一般性などについて質問があった。また、同話は広島で笑話化しているという報告、あるいは、「隠れて助かる」というモチーフは東アジアに広がっているとの指摘があった。

次の発表は、関根綾子(昔話伝説研究会)「鯖大師伝説の変容」。鯖大師伝説とは、「馬子が鯖を

運んでいたところ、高僧が鯖を所望。それを断ると高僧の呪歌で馬の腹が痛み、差し上げると、また呪歌で治った。馬子は改心し、お堂に高僧の像を祀った」という話である。徳島県海部郡海南町の八坂寺(鯖大師本坊)が伝承の中心で、現在、弘法大師の話として知られるが、もとは行基の伝承だった。その変化の時期が不明だったが、発表者は四国遍路の案内書・巡礼記などを詳細に検討し、明治末期から大正初期とした。また、地域の口承文芸の報告書を参照し、口頭伝承に行基の伝承の名残があることを確認した。

さらに全国に広まった鯖大師の祭祀地を一覧し、安置の理由や年代、分布地域をまとめた。安置の理由としては漁業関係の祈願、新四国霊場、高野山とのつながり、四国遍路、個人祈願などがあり、時代は毎時中期～昭和後期。地域は太平洋沿岸が多い。その分布の特色の考察が課題とされた。

会場からは、各地の類話や実態の報告があり、また、呪歌のもっていた役割と伝説の伝承への影響などについて意見・質問があった。

3人目は、高塚明恵(墨田区立すみだ郷土文化資料館)「梅若伝説の展開—福島県西白河郡泉崎村の事例より—」。比叡山の稚児・梅若丸は、人買いの信夫藤太にかどわかされて奥州に連れ去られ、途中、墨田川畔に葬られる。その塚を訪れた母は悲嘆にくれ、供養の草庵が後の木母寺になった。この物語は、能・説教節・浄瑠璃・歌舞伎などに材を提供し、梅若伝説として知られる。ところで、この梅若を連れ去ったのは福島県泉崎村の「喜藤太」で、その屋敷跡が呪われている、あるいは梅若の持仏を手にした村人に災いがあった、村人は木母寺に参詣しない、梅若忌(3月15日)に踊りを踊る、などの伝承が『江戸名所図会』『陸奥国白川領風俗問状答』『白河風土記』など近世後期の文献に記されている。

発表者はこの伝承について泉崎村を現地調査し、文政7年の「梅若丸和讃」や関連資料、伝承地の現状を紹介した。また、関東から東北にかけて梅若伝説を語り歩いた芸能者を想定、その伝承が泉

崎村の在来の喜藤太伝承に結びついたという考えを述べた。

なお、喜藤太は一夜のうちに会津領まで出かけて盗みを働いたという伝承があり、会場から怪盗伝説との結びつきについて意見があった。また、梅若伝説について、春の神事として「梅若」の祭りがあったとする柳田国男説との関連について質問があった。

4人目は、内藤浩言（國學院大学）「追憶に透かしみる伝承—福島県福島市飯坂の乙和御前伝説から—」。乙和御前は、義経の忠臣佐藤継信・忠信兄弟の母。兄弟は義経に従って戦死、また自殺するなど悲劇の死を遂げた。温泉で知られる福島市飯坂は、この佐藤一族の故地で、兄弟の父佐藤庄司基治（元治）の居城や一族の菩提寺・瑠璃光山医王寺がある。また、息子を亡くした乙和御前の嘆きで蕾のまま落花するという「乙和椿」。目を患った乙和御前が覗くと兄弟の面影が映ったという「波来湯（はこゆ）／乙和の泉／面影の泉」などの伝説もある。

ところで、当地の佐藤一族の女性の伝承は、松尾芭蕉『奥の細道』の記載以来、強調されるようになったらしい。また、芭蕉の本来の記載は、医王寺にあったという兄弟の嫁の墓（現存しない）についての文章で、舞曲『八島』や隣接する白石市斎川（さいかわ）の甲冑堂の伝承—二人の嫁が兄弟の出陣後、兄弟の甲冑を着て凱旋の様を演じ、病床の父基治を慰めた—を踏まえ、けなげな嫁の忠孝ぶりを嘆じたものだった。発表者は、こうした伝承の発展の契機や展開を紹介、文芸の影響や「息子を亡くした母の嘆き」というあらたに形成された伝説の主題を指摘した。また、伝説形成の背景として、「思慕」という心性や温泉地の風土に注目した。

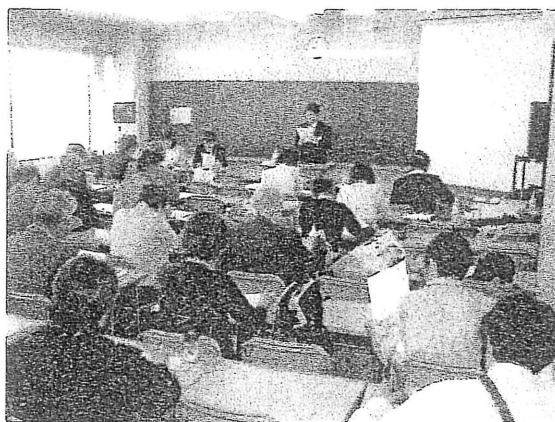
会場からは、開帳など、伝説の対象を創造する寺の活動に関して質問があった。

最後は、川村清志（札幌大学）『伝説』と『歴史』再考—石川県門前町におけるお小夜伝説を事例として—。石川県の門前町（現輪島市）に、お小夜という遊女をめぐる数奇な物語が伝わる。七

浦（しつら）の暮坂（くれさか）生まれのお小夜は、輪島の麦屋に奉公後、金沢の遊郭に売られ、加賀藩の事件に連座して五箇山（富山県）に流された。お小夜は村人に歌や踊りを教え、ここから五箇山の「麦屋節」が始まった。お小夜は地元の青年と恋に落ちるが、成就せず投身自殺。哀れんだ人々は故郷の暮坂に彼女の筍（こうがい）送り、実家ではそれを埋めて松を植えた。これが「お小夜の筍の松」だという。

だが、この物語は、五箇山の郷土史家・高桑敬親が提唱した地元民謡「輪島」の起源説に呼応し、昭和30年頃、門前町の郷土史家・山岸勇が唱えたものである。高桑は民謡中の地名・人名から推理して輪島のお小夜なる流刑人の一代記を再構成し、山岸はこれに暮坂に関するエピソードを追加。その後、歴史学・民俗学から批判を受ける一方、小説・エッセイで物語は広まっている。発表者は、このように狭い地域を越える伝説のダイナミックな展開の把握の必要性を主張。また歴史家・民俗学者なども含む、様々な関係者の活動と背景を、自覚的に検討することを説いた。

会場からは、郷土史家同士の連携について質問があった。回答として、本家争いのようなものでむしろ対立的だったが、近年は町村友好に伝説が利用されるという実態が紹介された。また、五箇山であらたな民謡起源説が求められた背景として、同地域の平家伝説顕彰への拮抗という点を発表者が補足した。



第一会場の研究発表

《第2会場》

真鍋 昌賢 (大阪府)

新堀歡乃「1920年代のご詠歌にみる「正調」の確立—金剛流の成立過程をめぐって—」

発表者は、高野山真言宗が伝える金剛流ご詠歌の成立過程を考察することによって、ご詠歌の「正調」が確立された意味について論じた。「正調」の確立をさぐる鍵は、伝承形態の再編成にある。発表者が焦点を合わせたのは、まず口伝に頼っていた旋律の楽譜化である。その際に採用されたのは声明の記譜法であったという。次に指摘されたのは、ご詠歌の音楽構造を割り出すための理論化である。この理論は雅楽・声明・西洋音楽のそれらを折衷したものであり、「伝統」と洗練の両立が担保する効果があった。最後に言及されたのは、詠階制度のによる「正調」の保持である。これらによって、ご詠歌は「正調」を確立し、「伝統」的な仏教音楽へと昇華されたという。以上をふまえて発表の締めくくりとして、稽古文化との結びつき、あるいは同時代の他の歌謡との関係についての検討が今後の課題として示唆された。1920-30年代のメディア状況のなかで伝承形態とそれをつくり出す思想というテーマに、ご詠歌というユニークな対象から考察を加えていく興味深い発表であった。

佐藤優「聴耳モチーフの説話における機能」

発表者の目的は、昔話「聴耳」は「呪宝譚」という話型分類のなかでのみ理解されてよいのかという問題意識のもとに、「聴耳」の主要モチーフの位置を中世において考察することにあつた。具体的には、「動物の言葉を解す」ということが記載説話の中でどの様に機能していたかを中世文献中心に検討し、モチーフを通時的に追いかけた。まず悉曇学における聴耳モチーフについての紹介がおこなわれ、次に中世仏教説話における聴耳モチーフが紹介された。発表では、中世期の聴耳モチーフが悉曇学の中で積極的に用いられたことが論じられ、六根清浄をわかりやすく説明するた

めに儒教思想を活用しながら、天台宗の談義所においても活用されていた可能性が提示された。昔話「聴耳」を儒仏文化を基層にもつ文字文化と関連づけた考察は興味深い。発表者の研究はモチーフの受容と展開を、中世を視野に入れながらよりひろい枠組のもとで考察しようとするものであり、今後の展開に期待したい。

小林 幸夫 (愛知県)

広川英一郎「怪異の目撃—「ヘビがタコになるハナシ」から—」

奇妙なハナシがあるもので、ヘビがタコになるという。ほら話ではない。みずから本当に見た、というのだ。それが江戸の随筆にも記録されて、各地で今に至るまで語られてきた。体験談ならば、それを見た当人の、その時、その場の、一回だけの経験であるはずだが、実際には、見知らぬ土地の他人同士が、あたかも同じものを見たかのように語られる。発表者はこれを、この怪異な世間話の語り手が、「伝承の束縛を受けている」と解釈する。

それはその通りだろう。同じようなハナシが、見も知らぬよその土地で、同じような語り口で伝承される例はいくらかもある。何もこの話に限ったことではない。それが昔話や伝説、そして世間話などの「ハナシの伝承」の実態なのだと思う。発表者は、「伝承とは何か」という問いを、「ヘビがタコになるハナシ」を通して明らかにならうとする。それでは、なぜ、この世間話がえらばれたのか。おそらく「体験談として語られる事例」として、このハナシが選ばれたのだろう。

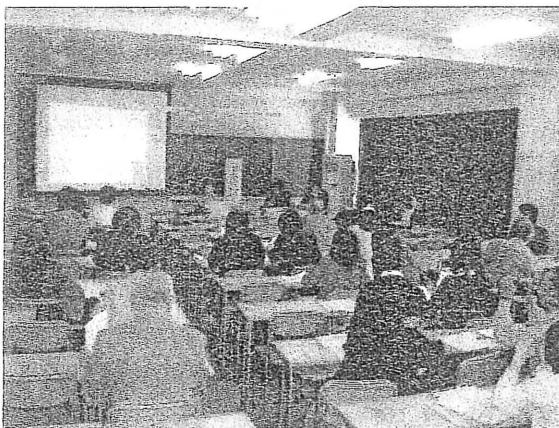
しかし、ありもしない怪異談を、「見た」といつて語るのも、古来からの説話の常である。それを認知心理学を援用して、説明に変えてしまうのは、少し残念な気がする。「伝承とは何か」という問いは、至極まっとうなだけに、ほかの事例にも照らし合わせて、考えてもらいたい。

新田寿弘「青森県の「江差の繁次郎」話—話型を中心に—」

「繁次郎」話、このニシン場の伝承話が、北海道、東北を中心に、およそ170話もあるという。それだけでも驚きである。それを集め、先行研究をふまえて話型を分類された。これもまたたいへんありがたい。これでニシン場の伝承話が、およそ通観できる。

もちろん通観されただけではない、分類して、できるだけこの話の特徴を説明しようとされた。一緒に働いていた、知っている、というのが「共時性」。ニシン場の日常語、それにかかわる「言葉遊び」。そして、ウンコの話、いわばトりの話の「虚構性」、この三つである。特に「言葉遊び」など、ニシン場の日常語に即して、言葉遊びが生まれてくることがわかって、たいへんおもしろい。たんなる知的遊戯ではないのだ。

けれどもどうだろう、たとえば繁次郎のウンコ話を、たんに「虚構性」とだけ説明しておわるのは、もったいない。稲田浩二さんに「トりの話」の論があったが、そういう仕事も参考にして、このおどけ者話の伝承のすがたを、今後、ぜひとも明らかにしてほしい。「おどけ話」や「言葉遊び」に関心を持つ者として、そう思う。たしか曾呂利にだってウンコ話があったはずだ。『昨日は今日の物語』にのっていた。ニシン場のおどけ者話は、近世の笑話にもつながっているのだ。



第二会場の研究発表

《第3会場》

間宮 史子 (神奈川県)

今大会では、若い研究者による研究発表がめだつた。これは、口承文芸研究そして口承文芸学会のこれからにとっては歓迎すべきことである。ここでは、第3会場の第1発表と第2発表について報告する。

澤井真代氏の「多様な聴き手と伝承経路—石垣島川平 来訪神儀礼の唱え言」は、実地調査に基づく語りのコンテクストを扱った研究発表である。石垣島川平(かびら)で年のかわりめの「節祭」に現れる来訪神「マユンガナシ」が唱えるカンフツ(神口)について報告した。マユンガナシになる男性成員によって伝承されるカンフツは、1年に1回唱えられる、聞く機会の限られたことばであるが、その知識は成員・元成員を中心に川平の人々の間で緩やかに共有されているという。

様々な立場の人々のなかで発せられ受容されている、カンフツの伝承の実際がある。これとは対照的に、女性神役「ツカサ」のカンフツは、その知識がツカサの間のみで厳しく限られているという。男性のマユンガナシ成員に伝承されつつも人々に共有されるカンフツと、女性神役にのみ限定されて伝承されるカンフツ。両者の比較検討は今後の課題ということだが、現在のカンフツ伝承の実際は、儀礼におけることばの多様性を考えることにつながっている。

これに対して、遠藤志保氏の「アイヌ英雄叙事詩の戦闘場面—男の語りと女の語り—」は、語りのテキストを扱った研究発表であった。アイヌ英雄叙事詩の中心となる戦闘場面の語り方は、男性と女性の語り手では違いがあることを述べる。鍋澤ワカルパと金成マツの語りによる「虎杖丸(いたどりまる)」を具体例とし、戦闘場面における、〈戦い〉の割合、〈戦い〉の描写、〈戦い〉以外の描写を比較した。男性の語り手は〈戦い〉を、常套表現を多用しながら丁寧に語る。それに対して、女性の語り手は、〈戦い〉そのものの描写には消極的だが、〈戦い〉以外の部分をセリフを多

用して細やかに語る。このような語り手の性差による特徴は、他の語り手による同じ場面をみても、ほぼあてはまるといえる。質疑の際に指摘のあった、男性と女性の語り手の伝承経路の違い、また語り手のジャンルの違いといったコンテクストの研究と合わせ、語り手のテキスト、つまり語り手の内部の研究もこれからさらに進められていく必要がある。(

中川 裕 (千葉県)

スチン『アルタイ讃歌』にみるアルタイ・エゼン

中国モンゴル自治区中のウリヤンハイ集団の伝承で叙事詩の前に唱える「アルタイ讃歌」と、バイド、ドルベド集団に伝わる「叙事詩アルタイ讃歌」との内容的な関連を論じたもの。アルタイの聖なる存在であり「アルタイ讃歌」で讃えられるエゼン・ハーンは、叙事詩の主人公であるハーン(父)によって再生し、その世継ぎであるハーン(息子)を受け、一方ハーン(父)は死後エゼン・ハーンとなり、息子は父となるという、「輪廻」の関係にあると論じる。この分析によってウリヤンハイ集団とバイド、ドルベド集団の伝承の間に密接な関係があることはよく理解できる。ただ、前者でどの叙事詩の前でも必ず「アルタイ讃歌」を唱えることと、後者に「叙事詩アルタイ讃歌」という話が伝わっていることとの関連は如何にという当然の疑問については、まだ十分に答えているとはいえない。そこをもう少し突っ込むことができれば、この地域における叙事詩の歴史的発展関係の議論につなげることができるだろう。

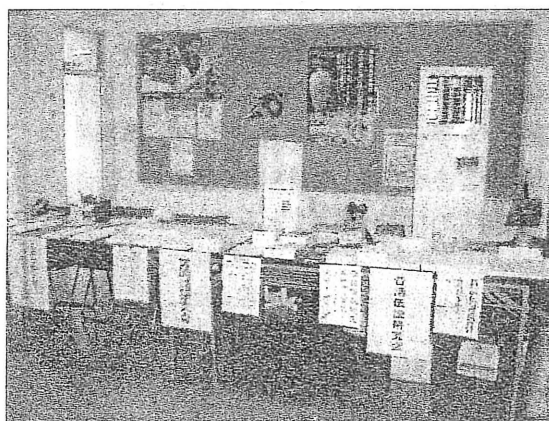
于曉飛「ホジェン族イマカン『ナウオンバルジュン』と旧約聖書」

中国黒竜江沿岸に住む少数民族ホジェン族の叙事詩イマカンについては、これまでわずかなことしか知られていないが、于曉飛氏は自らテキストの採録翻訳を行いながら精力的にその紹介に努め、その存在を世に知らしめてきた。今回は凌純声氏が1934年に著した、イマカンの内容を伝える最も早い時期の資料である漢訳テキストから、凌自身が

「旧約聖書創世記37章—50章のヨセフの物語である」という注釈をつけている「ナウオンバルジュン」を取り上げ、どのようにしてこの話が聖書からイマカンに入ったかの経路を推察している。そして于氏は1930—60年頃のキリスト教、聖書、民間芸能、識字状況などについての現地調査を行った上で、漢字を読めるホジェン人が漢訳の旧約聖書を読み、自分で改編し演じた可能性が大きいという結論を下している。この結論自体は妥当なものだろうとも思われるが、決定的な証拠はない。于氏自身も認めているように、この話の話者がどのどのような人物かということが、凌純声自身のノートや遺族の発見などで判明すれば、もう少し確実な議論ができるだろう。そのような資料の今後の発見に期待したい。



懇親会での自己紹介



書籍売り場

シンポジウム

「鬼と山人～『津軽口碑集』を基点として～」

高塚さより

津軽地方を含む鬼、もしくは山人についてはすでに多くの報告や研究が積み重ねられてきた。本シンポジウムは、そうした先行研究がどのような資料—伝承や記述—に依拠してきたのか、また鬼や山人という概念をどのように築き、それらを通して何をみようとしてきたのか、今後は何をどのようにみていくべきなのか、個々の資料にまで立ち返ることで、当地域における新たな鬼・山人研究への可能性を探ろうとした興味深い内容であった。安易に新資料の発掘や新たな理論を構築しようとしたものではない点が重要である。

本企画のコーディネーターである山田巖子氏の司会進行のもと、『津軽口碑集』というテキストを軸に様々な角度から議論が展開された。当日の進行にそって報告したい。佐々木達司氏「昔話の中の鬼」は、初期の青森県の口承文芸研究がどのように立ち上がっていったのか、どのような資料をもとに研究がなされてきたのか、を確認した。そしてそうした資料の中からあらためて青森県の昔話や伝承にみる鬼に注目し、そこには鬼に寄り添った心情や愛嬌のある存在というイメージが共有されていることを述べた。昔話や伝承というテキストから当地域の鬼や山人に対する意識にも迫ろうとした。花部英雄氏「山人とは誰か」は、『津軽口碑集』の中の「山人」に対する表現や他の山人伝承を取り上げ、そこに開発伝承との繋がりという読みを述べた。山人の説話伝承を開発者や土木技術者のメタファーとして捉えることで、各地の「職裂伝説」との関連、鉄器を携え海を渡ってきた土木技術者の存在が想定できるとした。さらにはその先にある朝鮮の神話伝説を視野に入れることにより山人を逆照射する可能性を示した。小池淳一氏「鬼に託されたもの」は、鬼やその周辺がどのように記述され、鬼というイディオムが津軽地方においてどのように発見されてきたのかを述べた。津軽地方の鬼研究の多くが大人を視野に入

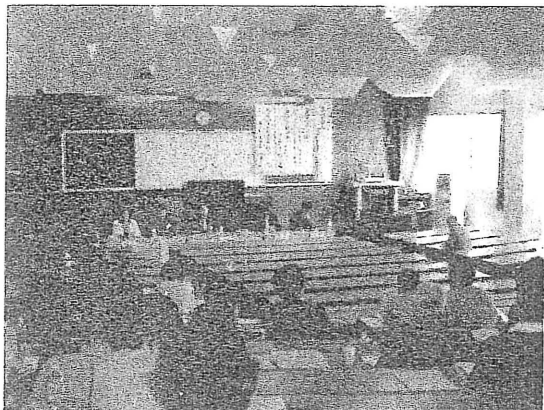
れ山人研究へと繋がる志向をもっているものだったが、『津軽口碑集』やそれに先行する民俗の記録における記述の姿勢や鬼の記事が示すものは、鬼—大人—山人という連鎖だけではないこと、例えば年中行事や昔話の伝承のなかに溶かし込まれて表現された鬼を追及するという別の可能性があることを指摘した。飯倉義之氏のコメント「遍歴する医師：内田邦彦(1881～1967)」は『津軽口碑集』というテキストをその著者である内田邦彦という人物の視点から浮き彫りにしようとした。内田の歩んだ軌跡や著作などを紹介、そこから内田独自の民俗学的知の形成とその特徴、『津軽口碑集』の記述の背景などを明らかにし、『津軽口碑集』とその中の鬼を考えるための視座を提供した。

本シンポジウム全体に通じる目的の一つは、サブタイトルの「『津軽口碑集』を基点として」が示すように、鬼・山人を対象化した記述であり、かつそれらの研究の原点である個々のテキストの場に戻って、そこに込められていたまなざしを問い直すことにより、開かれた鬼・山人研究を目指すことにあると言えよう。小池氏と飯倉氏は鬼・山人伝承がどのようなまなざしのもとに対象化され記述されてきたのかを取り上げ、佐々木氏と花部氏は語られ記述された伝承から、新たな鬼・山人研究をいかに切り開き、人々のそれらに対する意識を探っていくのかを提示された。『津軽口碑集』に関わる内田邦彦氏自身のメモなど周辺資料の発見と調査の経緯の報告や、当日ご親族の方々がおみえになられていたことなどにより、『津軽口碑集』というテキストを実体としてよりリアルに感じる事が出来たことも良かった。医師内田邦彦が『津軽口碑集』という資料集において鬼・山人なるものをいかに記述しているか、鬼・山人研究の視点から『津軽口碑集』をどのように捉え位置付けることができるのか、『津軽口碑集』を読み解くことで津軽の鬼・山人研究にどのような新たな視点を提示することが出来るのかといったことへの試みであった。会場では内田邦彦氏の人生・医師という職業と民俗学との繋がり、それらと『津軽口碑集』の記述との関連性などが話題となった。

飯倉氏の提唱した「医者の民俗学」も知の在り様の一つとして魅力的であり、『津軽口碑集』や鬼・山人との関りを探っていくことも出来るであろう。

『津軽口碑集』というテキストを検証することで様々な鬼・山人研究への糸口が見えてきたのではないだろうか。小池氏も述べていたように、他のテキストも同様の検証が必要とされている。

(神奈川県)



シンポジウム

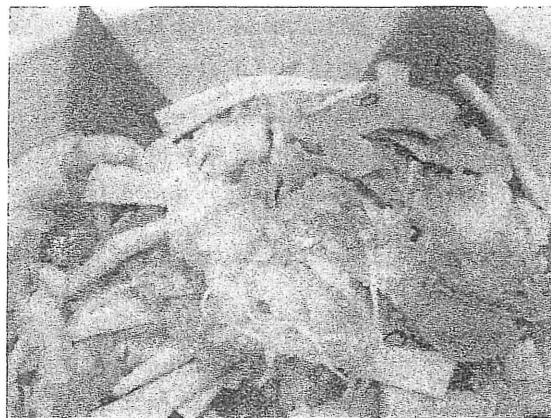


会場から望む岩木山

6月2日の懇親会の様子



沢山の郷土料理が並ぶテーブル



鮭とたけのこの飯ずし(なれずし)

○事務局便り

当学会の創立にかかわり、長らくご指導くださいました伊藤先生、野村先生のご冥福を、心よりお祈りいたします。

○第54回例会のご案内

2007年10月20日(土) 午後2時から5時

場所 東京学芸大学 S103 教室

テーマ「アイヌ・女性・口承文芸」 前半 基調報告 後半 シンポジウム

前半 趣旨説明

14:00～14:10

基調報告

萩中美枝 14:10～15:00

(休憩 15:00～15:15)

後半 シンポジウム

萩中美枝

千葉大学

萩原真子

立正大学

藤井貞和

司会

東京学芸大学

石井正己

15:15～17:00

お問合せ：東京学芸大学 石井正己研究室 TEL・FAX 043(329)7246

○事務局が移転しました。

〒214-0014

川崎市多摩区登戸 3460-1-704

㈉小澤昔ばなし研究所気付 日本口承文芸学会事務局

044-931-2080 (電話・ファックス)

e-mail:mukaken@qf6.so-net.ne.jp

今期は民間の研究所に事務局を置くことになりました。事務局にご連絡くださる場合は、平日の10時から17時のあいだにお願いいたします。

日本口承文芸学会を広くご紹介下さい。

日本口承文芸学会への入会を希望なさる場合は、事務局に連絡をするか、学会HP (<http://ko-sho.org/>) から用紙を取り込んでください。

入会金 1000円、年会費 4000円です。

郵便振替口座 00180-4-44864 をご利用下さい。
